三

蒋唐は銀の簪を手に握り締め南門坊※の貸家に戻る途中だった。陽も西に傾きだし、酒楼の影も急にその長さを伸ばしつつある。太原府の瓦子、南のはずれだった。この近くには、太原府一の豪商魯櫂の邸宅がある。

※坊　城郭内の方形の区画

蒋唐は魯櫂をこころよく思ってはいなかった。品を仕入れる時には、脅すように安く買い叩くくせに、売る時は驚くほどの高値で押し付ける。蒋唐のような役人と繋がりのない商人には、とことん邪魔を入れる。それでも屈しない時は、子飼いのならず者を使って排除する。蒋唐は、闇に葬られた商人が少なくないことを知っていた。魯櫂は食客と称して、そうした者達を常時二・三十人かかえていた。府の役所はけして動かない。魯櫂にたっぷりと鼻薬を効かされているので、むしろ被害者の方を責めた。太原府で商いをするには、魯櫂の手の中に入るか、命をかけて自前の道を切り開くしかなかった。蒋唐は太原府の商人ではない。一年前までは、河間府でそれなりの店を持つ遼相手の商人だった。歳も五十を過ぎ息子も大きくなったので、河間府の店を任せ、静かに余生を送ろうとしていた矢先、女真の完顔阿骨打から太原府行きを依頼されたのだった。

阿骨打とは古くからの馴染みで、その人となりにも生き方にも好感をいだいていた。だからといって、この歳でそう簡単に他所の土地に移り住むと決めたわけではなかった。何かが蒋唐の背中を押した。今でもそう思っている。

妻を病で失い、息子も立派に独り立ちし、蒋唐の心のどこかに、微かな風が吹き込んで来たのかもしれなかった。今ではむしょうに、早逝した下の息子のことが思い出された。馬に踏まれて死んだのだった。

河間府の役所に続く大路で、知府の息子が乗った馬に潰されたのだった。遅く出来た子だったし、何よりも聡明で明るい子だったため、夫婦ともに将来を嘱望していた。それが七つで失われた。知府の息子

は、子供が突然馬の前に飛び出して来た。これは避けようのない事故だと主張した。だが、その場面を目撃した人々は、それは違うと口々に証言した。

慣れない馬に乗った知府の息子が、暴れる馬に不用意な鞭(むち)を入れたため、馬が暴走して近くにいた子供を踏んだ。避けきれなかったのは子供の方だろうと。皆の証言は同じだった。

しかし、どんなに蒋唐が訴えても、それが通ることはなかった。そのうち知府からの脅しがはじまり、これ以上騒ぎ立てするなら商売を出来なくしてやると言われた。それでも非はそちらにあると抵抗すると、府内擾乱という罪で牢営※に送られた。押司(おうし)※の一人に公正な者がいて、審議をやり直しようやく三月後に牢営を出てみると、店は壊され妻は病の床に就いていた。※牢営　軍管轄の牢獄　※押司　書記等の下級役人

蒋唐を絶望が襲った。黙り込み、敬と名づけたあの子は、はじめからいなかったのだと思った。いや、思い込もうとした。

あの時からだ。蒋唐は思った。あの時から風が吹きはじめたのだ。可愛かった七つの蒋敬を、忘れようとしたあの時から、蒋唐の心の中に吹き止まぬ風が吹いているのだった。

それからの蒋唐は、上辺だけは仕事をこなしていった。心の中に虚しい風をいだきながら、残る息子のためにと働いた。そして五十を過ぎ、そこそこになった店を息子に委ね、心の中の風とともに、ひっそりと暮らしていこうと蒋唐は退いた。

阿骨打から依頼が来たのはそんな時だった。知らない城郭(まち)で暮らす。それが蒋唐には新鮮に感じられた。それよりも蒋唐に受諾を決めさせたのは、その依頼の内容だった。娘が一人、太原府で遼との交易の要になっている。その娘の面倒を見てやってほしい。そういう内容だった。娘は曹瑛といい、歳は十六ということだった。生きていれば、蒋敬も同じ歳のはずだった。蒋唐は、何かに背を押されたように感じた。おまえにしては珍しいな、と阿骨打にはからかわれたが、蒋唐はすぐさま諾と答えていた。

それから一年が過ぎた。太原府はかつて北漢(ほくかん)の宮城が置かれ、晋陽(しんよう)と

呼ばれていた。それだけに河間府よりも大きく、何より華やかだった。しかし、河間府よりは遼から遠いせいか、遼との交易は多くなかった。そこに目をつけた曹瑛という娘は賢い。そう思った。蒋唐は、南門坊の一角にある曹瑛の蔵の隣に家を借り、この一年、曹瑛を陰ながら見守ってきた。魯櫂が接触してきた以外、これまでは平穏だった。魯櫂は曹瑛を通して宋家村に赴き、遼との交易の中心である宋雪華と話をしたようだった。交渉は決裂したらしい。当然だと蒋唐は思った。魯櫂は官と手を結び、悪辣な商売をしてのし上がった男だ。そんな輩の申し出を、曹瑛達が聞くはずもなかった。蒋唐はこの一年、曹瑛を見続け心の底から感心していたのだった。

商売と言っても、仕入れた値にほんの僅かな利を乗せるだけで、遼でも質のよい公正な商人としか取引をしない。人々に出来るだけ求めやすい値で売る。それが、取引相手に課せられる条件ということだった。他の取引よりも圧倒的に安い宋家村との交易を、多くの商人が切望した。仕入れ値が安いから、多少安く売っても十分な利幅がある。おまけに、安いからあっという間に売れる。品物の質はけして悪くない。宋家村で織られる絹織物にいたっては、太原府のどこの物より上等だった。

そんな宋家村を、魯櫂が黙って見ているわけがなかった。かなり痛烈に拒絶されたと噂されていた。蒋唐は溜飲が下がる思いとともに、一抹の不安も感じていた。あの魯櫂が、このまま引き下がるはずがない。蒋唐はここ暫く、今まで以上に曹瑛の身辺に注意を払っていた。

中庭の桃の蕾が日に日に膨らみを増している。あと三・四日で美しい花を咲かせそうだった。梅の木はかなりの本数あったが、桃の木はこれ一本だけだった。梅花はすでに咲き終わり、今はこの桃の蕾が雪華の楽しみになっている。

「お嬢様、表にまたあの男が来ていますが」

雪華に代わって館のことを取り仕切る伍小母さんが走って来た。

雪華の幼い頃から宋家を支えてきた人だった。母が弟の清を産んで

すぐに亡くなったので、雪華にとって伍小母さんは母のような存在だった。一歳に満たず病で死んだ弟の宋清の記憶とともに、雪華には母の記憶も持ちようがなかった。伍小母さんは遼に住んでいた漢人で、夫の孫定(そんてい)が博打(ばくち)の諍(いさか)いから人を殺し、捕縛を逃れるために仲間を集い山賊となり、半年後に捕らえられ遼で処刑されたとのことだった。伍小母さんは夫が山に入った時に縁を切ったため罪は問われなかったが、遼にはいづらく国境を越えて宋に入った。宋側の国境近くで山賊に襲われ、連れていた子供二人を奪われたのだと言っていた。大怪我をして道端で蹲っていた伍小母さんを、所用で代州に向かっていた父宋江が偶然発見し、医師の治療を受けさせたのだった。三月後、傷が癒えた伍小母さんは父を頼り宋家村にやって来た。宋に身寄りがなかったし、深く父の恩義を感じていたようで、小者として宋家で働かせてほしいと父に頼み込んだのだった。母が亡くなって一年ほど経った頃で、娘の養育に難しさを感じていた父は伍小母さんに働いてもらうことにした。それ以来十五年、伍小母さんは宋家の要として館をきりもりしてきた。ただ、奪われた二人の子供のことは忘れられるはずもなく、折にふれ消息を尋ねているようだった。三年前の賊の襲撃の時には、祭りの用意のために村を離れていて事なきを得ていた。しかしその悲しみは、今になっても癒えてはいない。

「また来ています。ずうずうしいにもほどがあります。お嬢様、あの男に二度と来るなと言ってやってください」

雪華はまたかという、諦めにも似た思いに襲われた。昨冬から、もう何度やって来たことだろう。伺(うかが)いも入れず、いつも突然やって来ては、勝手な思い込みだけを捲(ま)くし立てては帰っていく。迷惑な男だ。しかし、不思議に憎めない男だった。

前庭の方から、蹄(ひづめ)の音とともに男の大きな声が響いてきた。

「雪華、いるんだろう。俺だ、おまえの夫になる俺様が来たんだぞ。恥ずかしがらずにさっさと出て来い。あんまり俺を待たせるなよ」

雪華はばかばかしくて言葉も出なかった。いつ妻になると言った。妻になるくらいなら、一生道姑(どうこ)※でいてもいい。まったく、話にならら

ない。

※姑　道教の尼

「お嬢様、どうします。無用様に報せて、つまみ出してもらいますか」

伍小母さんがおろおろしながら言った。

「無用なら、今朝早く南の森に行ったわ。暫く乾燥した日が続いたから、野火の心配があるって見回りに行ったの。未牌まで戻らないと思うわ」

「それではどう致しましょう。私はあの大声が苦手なんです」

「困ったわね。いいわ、わたしが出るから」

「お嬢様、そんなことをしたら帰りませんよ。ああ、せめて石勇でもいれば……」

「いいから、小母さんはここで待っていて。わたしが話をつけてくるから」

雪華は小走りに前庭の方へ向かった。

馬に乗って大声を上げている若者が見えた。長い髪を後ろで束ね、派手な錦の衫※を着た浪子ふうの若者だった。※衫　上着

「また来たのですか。何度来ても無駄なだけです。わたしはあなたと関りを持つ気はありません。お引取りください」

雪華が強い口調で言った。

「おうおう雪華、いたんじゃないか。あの婆あ、いないなんてほざきやがって」

「小母さんを婆あなんて呼ぶことは許しません。それに何ですか、雪華などとなれなれしい。あなたに雪華などと呼ばれるいわれはありません」

「いいねえ。怒った顔も一段と綺麗だ。さすが、俺が惚れただけある」

「ちゃんと聞きなさい。あなたとは、たまたま東の森で出会っただけではありませんか。それ以来、何度押しかければ気が済むのですか」

「たまたまじゃない。あれは、運命の出会いってやつだ。俺はあの日、兎を捕りにあの森に出かけた。船を使って反対側の岸にな。汾水は流れが急だし川幅が広いから、俺達の村の者は滅多に対岸には渡らない。それなのに俺は、どうしても渡りたくなったんだ。いや、渡らなくち

やって思ったんだ。兎なんて、こっち岸の森にいくらでもいるっていうのに。なぜだか俺は、船に乗り向こう岸に行った。俺はこう見えても、櫓を扱うのはうまいんだ。船着場に着いてふっと横を見たら、遠くにおまえの姿が見えたんだ。その後はおまえの知っての通りさ。まるで、玉皇大帝様※のお導きじゃないか」　※玉皇大帝　道教の最高神

「何を大げさな。たまたま対岸に渡って、たまたまその時、そこにわたしがいたというだけではありませんか」

「そんな言い方をしちゃ実もふたもないじゃないか。とにかく俺は、おまえに出会い楽しく語り合った。そして俺はおまえが気に入り、おまえを妻に迎えようというのだ」

「あなたがしつこく付きまとっただけではありませんか。わたしには、楽しく語り合ったなどという憶えはありません」

「その強気なところが俺にはたまらん。俺は晁家村の保正の一人息子、おまえは宋家村の保正の一人娘。おあつらえ向きじゃないか。誰が見たって、これ以上の取り合わせはないと言うぜ」

雪華は怒りを通り越して、ほとほと呆れてしまった。

「少なくとも二人、そうは思わない者がいます」

「誰だい、その二人っていうのは。おまえと俺は歳も同じだし、まさに似合いの夫婦じゃないか」

「伍小母さんと無用」

「無用……

「今すぐ出て行かないと、無用を呼びます」

「分かった分かった、帰る。お姫様は本日ご機嫌斜めってことらしい」

「分かればよいのです」

「まあ、一旦は引き返すが、俺は諦めたりしないぞ。雪華、そのうちおまえの方から嫁にしてくれって頼みに来るような、そんな男に俺はなってみせる。この晁蓋を見ていてくれ。俺にはでかい夢がある。その夢はな、おまえと一緒に叶えるものなんだ」

そう言い残し、晁蓋は風のように正門を駆け抜けて行った。舞い上がる土煙の中で、雪華は晁蓋の後姿を見ていた。馬の扱いには長けて

いる。それだけは認めた。

遠くの木陰に人のものらしい姿が見えた。そのすぐ後に、黒い煙が立ち昇るのが見えた。無用は急いで煙を上げている木に向かおうとしたが、敷きつめる枯れ枝に阻まれてなかなか先に進めない。数日間晴天が続いている。何もなくとも、木々は乾燥し、枝の擦れでさえ火を上げる原因になりそうだ。

「こりゃ大変だ」

気は逸(はや)るが身体の進みは遅々たるものだ。見る間に赤い炎が周りの木々に燃え広がった。もう駄目か。無用は舌打ちした。もうもうと黒煙が空に舞い上がり、五・六本の木が真っ赤な炎を噴き上げていた。

左手の街道の方から蹄の音が聞こえてきた。無用は一瞬そちらを見たが、馬に乗って去って行く人影を捉えただけだった。無用は追うわけにもいかず、枯れ枝を押し分けてようやく燃え上がる木々の近くに辿り着いた。この火を消すことは不可能と思われた。無用はまだ火が燃え移っていない木を両手でかかえ込むと、渾身の力を振り絞って一気に根元から引き抜いた。抜けた。根にたっぷりと土をかかえた木が、その根を火元に向けて横たわった。これで何とかなる。心の中でそう思いながら、無用は次々と周りの木々を引き抜いた。七本目の木は、両手でもかかえきれないほどの太さだった。

「こりゃあ、黄巾力士(こうきんりきし)※だって無理だわい」※黄巾力士　道教の使役神

無用は、疲れと熱さで滴り落ちる汗を拭いながら、途方に暮れて立ち尽くした。

「ままよ、やってやれんことはない」

勢いをつけて、無用は肩からその木にぶつかった。みしり、と根元で音がした。無用の左肩から身体半分に、猛烈な痛みが走り抜けた。もう一度ぶつかった。根が少しだけ顔を出した。痛みはもう感じなかった。両手を突き出し、思いきり木の幹を押した。轟音を発しながら木は倒れた。無用は腰を落とし、荒い息を繰り返していた。

「これでまた一つ、話の種が増えたな」

肩で息をしながら、無用が呟いた。
「よし、後は大きな木はなさそうだ」
息が落ち着くのを待って、無用は次の木に取りかかった。燃えている木も徐々にその勢いを弱めつつある。周囲の木を抜いたので、どうやら延焼はまぬがれそうだった。
「何とか食い止められそうだな」
無用はため息をつきながら呟いた。

「お嬢様、また人が」
伍小母さんが、幾分心配そうな顔で雪華を呼びに来た。先ほど晁蓋の狼藉をいなしたばかりだったので、雪華はうんざりとした気分に襲われた。
「どなたかしら」
雪華の声には、多少の苛立ちがまじっていた。
「知府の遣いとおっしゃっていますけど」
「知府の……原府の」
「ええ、太原府の黄文炳閣下の遣いの者だと」
「わたしに心当たりはないけど。まあいいわ、会ってみましょう」
雪華はそう言い残し前庁に向かった。
従者らしき二人に挟まれて、恰幅のいい男が凳に腰掛けて、雪華の来るのを待っていた。
「お待たせしました。宋雪華です」
「おまえが宋雪華か。儂は袁偉という。知府閣下の遣いで参った」
「太原府の知府様が、わたしに何の用なのですか」
「黄文炳閣下が、おまえと太原府の商人魯櫂との諍(いさか)い聞きつけてな、おまえ達の手打ちの仲介をと仰せになられたのだ」
「諍いとは大げさです。ただ魯櫂殿の申し出を、わたしがお断りさせていただいただけのことです。諍いなどというようなものではありません」
「この宋家村も太原府の管轄だからな。閣下は同じ管轄の商人同士の

諍いに、随分と心を痛められておる。まして魯櫂は太原府一の大戸(たいこ)。そのような者が恥をかいたままですむわけがあるまい」
「ですがわたしとしましても、魯櫂殿と手を組んで交易を行うつもりはありませんが」
「そんなことはどうでもいいのだ。要は、魯櫂とおまえが仲直りしたという形だけ整えばいいのだ。仕事で手を結ぶなどということは、また別の話だ」
その言葉に、雪華は少し安心を覚えた。知府の介入ということで、強制的に魯櫂の参入を認めろと命じられるかもしれない。そう危惧していたのだ。
「で、どうすればよいのでしょうか」
袁偉はほっとした表情を見せた。
「知府閣下が、本日宴を設けておられる。開宴は陽の落ちる前にしたいとのことだ。突然なことなのは分かるが、遅れずに来てほしい」
雪華は、その程度のことなら何とかなるだろうと思った。
「分かりました。これから用意して、酉牌(ゆうはい)※までには間に合うようにいたします」
※酉牌　午後六時頃
「そうか、それはありがたい。儂も無事役目を果たせるというものだ。知府様の屋敷は知っておるな。昔の北漢の宮城だ。門衛に話しを通しておくから直接訪ねよ。供の者は必要ない。屋敷の中に泊まる場所を用意してある」
「分かりました」
「それでは儂は先に戻って、知府様に報告するとしよう」
そう言って、袁偉は馬に乗り太原府に戻って行った。
雪華は幽(かす)かに作為の匂いを感じたが、無理に交易の仲介をされるよりましだと思い直した。ただ、魯櫂に会うのは気が重かった。知府の黄文炳とは面識がない。しかし、こうしたことは雪華の交易が大きくなるにつれて仕方のないことなのだろう。これからは太原府との折衝も必要となるだろう。そうなると、いかに優秀とはいえ、曹瑛一人では手が足りそうにない。自分が行かねばならないか。雪華はそう考え

ていた。
「お嬢様、太原府に行かれるのですか」
いつの間にか、伍小母さんが隣にいた。
「ええ、これから用意して、出来るだけ早くに発ちます。少し時間はかかるでしょうけれど、残月なら楽に申牌に間に合うわ」
「それはそうでしょうけど、何か引っかかります。なぜそんなに、その商人の肩を持つのでしょうか。知府ともあろう高官が」
「ただの商人ではないからよ。魯櫂といえば、東京開封府にまで名を知られた大商人ですもの。ある意味、知府よりも力を持っているわ。ここはおとなしく、二人の顔を立てるほかないわ」
「はっきりとではありませんが、何か嫌な予感がします。こんな時、無用様がおられたら心強いのですが、今日に限って遅いようです。せめて石勇でも連れて行かれたら」
「必要ないわ。供は連れて来るなと言うし、石勇だってすることはあるの。遊んでいるわけではないのよ」
「どうしてか、胸騒ぎがするのです」
「心配性ね。伍小母さんには、遼の言葉だけでなく色々なことを教わりました。だから、注意だけはします。剣は持って行けないでしょうけど、飛鏢を六本隠し持って行くわ。」
「本当に大丈夫でしょうか。お嬢様に何かあったら、私は宋江様に申しわけがたちません」
伍小母さんは父を慕っていた。慕っていたというより、尊敬していたようだった。命を落とす寸前に助けられ、使用人というより家族のように遇され、もう一度生きる意味を授かったように思っているのかもしれない。雪華が幼い頃は、まだ十分に女としての魅力を保っていたが、父はそちらの方にはあまり関心がなく、伍小母さんも前夫のことで懲りたのか、二人の間に男と女の匂いは感じられなかった。心と心の結びつきがあったのだろう。そう雪華は思っていた。

「用意が出来次第出発します。帰りには曹瑛のところに寄ってこようと思っているので、戻るのは明後日になると思います。そう、無用に伝えてください」
雪華はそう言って奥に向かった。

袁偉が宋家村を出て一刻も経たないうちに、丁洪が戻って来た。何をしてきたのかうっすらと汗をかいている。袁偉は、この魯櫂の大番頭が嫌いだった。魯櫂も好きになれなかった。太原府一の大戸ではあるが、その実態は賊とそう変わるものではない。この丁洪にしても、裏ではあくどい仕事に手を染めていることをつかんでいた。
「仕事は終わったのか」
「ええ、しっかりと」
「儂もだ。あの娘は一人で来る」
「そうですか。まあ、供を連れて行きたくても無理でしょうがね」
「おまえの仕事か」
袁偉の目に怒りの色が浮かんだ。
「おっと、そんな恐い顔しないでくださいよ。人死には出してませんから。私だって命は惜しい。あんな物騒な怪物とぶつかるなんて御免ですよ」
「おまえがか。儂はな、目も見え耳も聞こえる。おまえがこれまでどんなことをしてきたか、おおよそのことは知っているつもりだ。そのおまえがそう言うのだから、あの娘にはかなりの者がついているということだな」
丁洪の返事はなかった。
どうしたのだ俺は。袁偉は思った。こんなことを言うような自分ではなかったはずだ。
上からの命令をただ黙々とこなす。自分の感情は出来るだけ差し挟まない。そうやって、これまで大過なくすごしてきた。黄文炳が、私的

とも言うべきこの仕事を振ってきたのも、自分のこれまでの仕事振りを評価してのことに違いなかった。だが、今度の仕事のこの苦々しさは何だ。魯櫂はあの娘の失脚を狙っている。そのために黄文炳を動かした。罠に嵌めるために。この男はそれを補完するために動いたのだろう。

なぜだかむしょうに腹立たしかった。いつもにはない感情の動きだった。あの娘か。袁偉は思った。あの娘が、薄汚れたこんな奴らの罠に嵌まる。そして、その片棒を自分が担いでいる。自分でも理解出来ない心の疼きだった。いつもはそんな気持ちなど簡単に抑え込んでいた。どうしたんだ儂は。袁偉の心は乱れた。

「おまえ達が何を企んでいるのかは知らんが、あまりあこぎなことはしない方がいいぞ。民の中にはおまえ達を悪く言う者もいる」

丁洪は、暫しの間袁偉の顔を見つめていた。その目に宿る酷薄な炎に耐えきれず、袁偉は思わず目を逸らした。

「あんたからそんな言葉を聞くとはね。あんたも下級役人として、さんざん甘い汁を吸ってきたじゃないか。いいや、あんただけじゃない。あんた達役人は俺達よりもよほどあくどいぜ。俺だって民の一人さ。善良とは言えないけどな。面白いことなんざ何もない、つまらない人生だったさ。それが、腕を買われて魯櫂の旦那に拾われた。それからは楽しいことばかりさ。俺はな、こうして人を嵌めたり、人に苦痛を味わわせるのが好きなのさ。自分が生きてるって感じるからな。今俺は、またとない充実感を味わっているんだ。邪魔するなよ」

狂っている。袁偉は、出来るならこの男から逃げ出したいと思った。

蒋唐は銀の簪を握り締めていた。昨日はあいにく曹瑛が不在で、せっかく買った簪を渡すことが出来なかった。今日は隣の蔵で人の気配がする。荷運びをしているようだった。蒋唐は表に出て曹瑛の姿を捜した。暫く蔵の出入り口を見ていたが、曹瑛の姿は見えなかった。二

人の男が汗を流しながら荷を運び込んでいる。白地に黒で紋様が描かれている。磁州の焼き物だろう。最近は遼でも喫茶の習慣が広まり、茶葉とともに茶器の需要も旺盛だった。曹瑛の目に適(かな)った物なら、遼でも歓迎されるだろうと蒋唐は思った。

「曹瑛はいないのか」

蒋唐は男の一人に尋ねた。

男は立ち止まり、目に流れ込む汗を拭った。

「ああ、若女将のことか。ついさっき茶を買ってくるとか言って出て行ったぜ。隣の小父さんに振舞いたいとか言ってな」

蒋唐は、心の中に温かい灯が点るのを感じた。いい娘だ。こうした人に対する細やかな心遣いが出来る者など、捜しても見つからない世の中だ。

「そうかい。どっちの方へ行ったか分かるかい」

「西の瓦子へ行ったぜ」

西の瓦子なら呉家茶舗だろう。ここからはかなりの距離があるが、高価だが優れた茶葉を扱っている。戻って来るには時間がかかりそうだった。今日はこれといった用事もない。

この一年、蒋唐は自分の商いには関心を持たなかった。細々と絹織物を扱っていたが、魯櫂の横槍もあり、今はほとんど休止状態だ。何よりも、曹瑛といることが楽しく、自分の商売などどうでもいいというのが本音だ。仕事などしなくても、十分な貯えはあったし、阿骨打から送られる銀もある。蒋唐にとって、太原府に留まる理由は曹瑛だけと言ってもよかった。

「そうかい。それじゃ散歩がてら私も行ってみるとしようか」

蒋唐は足取りも軽く西の瓦子、昨日歩いた辺りに歩を進めた。もう昼を過ぎ、春とはいえ暑いほどの陽射しが城壁を照らしている。

「行き違いにならなければいいが」

暫く歩くと魯櫂の屋敷に出た。正門の近くまで来た時、突然男が駆け出して来た。門の内側に向かって何やら毒づいている。蒋唐は興味

を覚え、その男の後を尾けてみることにした。浪子ふうの身なりで、どう考えても魯櫂の屋敷には不釣合いだと思えたからだ。もしかすると魯櫂が弱みでも握られているのか。そんな期待がないわけでもなかった。男は南の路地を曲がった。蒋唐は気づかれないように路地の手前で耳をそばだてた。

二つの声が聞こえる。仲間がいるようだ。

「番頭の野郎、金を出さねえ。あれっぽっちの金で済まされる話じゃなかったんだぜ」

「李吉(りきち)、おめえ博打の金を返さねえつもりか」

「金づるはあるんだ。魯櫂に会ってちゃんと話せば、それなりの金は手に入るはずだ」

「本当かよ。とにかく、今日中につけを払わなけりゃ、魚の餌ってことになるんだぜ」

「分かってるさ。何とかするからよ。もう少し待ってくんな」

「まあな。約束は今日中だ。まだ時間はある。せいぜい頑張ることだな」

もう一人の男が路地から出て来た。蒋唐は気づかれぬように塀の陰に隠れた。男が遠ざかるのを確かめ、蒋唐は路地に入った。李吉と呼ばれた男が、黙って天を仰いでいる。

「もし、いかがなされました。そこの道で、つい耳にしましてな。何ぞお困りのご様子ですが、私でよければお話をお聞かせください。話によっては何かお手伝いが出来るやもしれません」

男は、一瞬驚いたような表情を見せたが、蒋唐のいかにも商人らしい物腰と身なりを見て、急に顔を綻(ほころ)ばせた。

「どこのどなたか存じやせんが、お声をかけていただきありがとうございます。あっしは李吉と申しやすが、実は借りた金が返せなくって途方に暮れてるんでさあ。いえね、明日になりゃあ確かに金は入って来るんですが、相手は今日中でなきゃ駄目だの一点張りで、ほとほと困っちまいやした」

李吉はそう言って、蒋唐の頭から足先までねめ回した。いざとなれ

ば、蒋唐を殺してでも金を工面しようという様子だ。だが、蒋唐はこうした手合いの扱いには慣れている。
「それはお困りでしょう。私はこう見えても絹を扱う商人。金にはいささか余裕があります。ことと次第によっては、都合をつけられるかもしれません」
「おお、そうかい。それは大助かりってもんだ。いやね、たったの一日なんでさあ。明日になれば、魯大尽から金をもらえる手はずなんでさあ」
「魯大尽から……」
「ああ、今日は知府のところに行っていていないってことだが、魯大尽とは知り合いなんでさあ。それなのにあの番頭ときやがったら、てんで話も聞きゃあしねえ」
李吉は精一杯自分を大きく見せようとしている。蒋唐を扱いやすい相手と思ったようだ。
「そんなうまい話がありますかな。魯大尽といえども、ただで金は出しますまい」
蒋唐はかまをかけてみた。何か聞き出せるかもしれない。
「あっしはね、魯大尽にとっておきの話を聞かせたんだ。それで今日、知府のところへ行ってるってわけさ」
「どんなお話だったんです」
「そんなこたあ言えねえよ」
「ですが私も商売。話の内容によっては、確実に戻ってくる金かどうか分かります。そうすれば、金利をお取りする必要がないかもしれません」
「そうか金利を取らずにか……」
「ええ、お近づきの祝いとでもお考えください」
李吉はしめたという顔をした。浅ましい顔だ。蒋唐はそう思った。
「そういうことなら、まあ、聞かせてもいいだろう。先日宋家村に行った時に、あっしは偶然前の保正の娘、ほらあんたも知ってるだろう、遼と交易してるってえあの娘を見たんだ。そいつが遼の偉い将軍と何

やら密談してやがったんだ。こりゃあ大変だと思って、あっしは急いで魯大尽に報せたんだ。何せ商売でのこともあるし、知府とも繋がってるし。そしたら、魯大尽もそりゃあ大事だってことで、あっしに感謝して銀をくれたってわけさ」

李吉は得意満面で話した。こいつは一番金になりそうなところに話を持って行ったのだな。蔣唐は思った。それにしても、宋家村のことは蔣唐も驚いた。曹瑛の姉とも言える

宋雪華が、理由(わけ)もなしにそんなことをするはずがなかった。遼の将軍との会見には、何か意味があるのだろう。それも、平和的なことで。だが魯櫂の手にかかったら、そんな話もうまく利用されるかもしれない。魯櫂が宋雪華に面子を潰されたことは、太原府の商人の間では広く知られている。蔣唐は、言葉にならない不安が腹の底から湧き上がるのを感じた。

「それはもう終わったことでしょう。銀をいただいたのなら、それで礼は済んだと思いますが」

「そうじゃねえんだ。もう一人のことさ。それで、もう一儲け出来るってわけさ」

蔣唐は、心の臓が鷲掴(わしづか)みされたように感じた。もう一人、それは曹瑛に違いない。

「魯大尽のところでただ飯喰らってるごろつきが、血眼になってあの娘を捜していやがるが、どっこいあんな役立たずどもにゃあ無理ってもんだぜ」

「その娘とは」

「曹瑛って娘さ。あんたも商いをしてんなら知ってるだろうさ。この娘はな、若いが切れ者なんだ。宋家村の出先として、太原府の方を一手に取り仕切っていやがる。こいつをな、おいらは先刻西の瓦子で見つけたんだ」

蔣唐は、怒りで目が眩みそうになった。こんな奴に、あの曹瑛が何かされたら。それでも蔣唐は面(おもて)には出さなかった。

「それで金が入るのですか」
「あたりめえさ。娘を放っておきゃ、どう出られるか分かったもんじゃねえ。宋家村にゃあ、色の黒いおっかねえ野郎がいるって話だ。そんな奴にこのことを知られりゃあただじゃすまねえ。噂じゃあ、十人二十人じゃ歯が立たねえっていうじゃねえか。大分前に大暴れした、黒旋風の再来だなんて言う奴もいるくれえだ。知府はともかくとして、魯大尽が気にならねえわけがねえ。あそこのただ飯喰らいに、腕の立つのはいねえからな。いくら魯大尽でも兵を動かすこたあ出来ねえ。それでよ、保正の娘と一緒にな、この曹瑛って娘も引っ括れば、暫くは連絡のつけようがねえってもんだ。その間に黒い奴をどうにかすりゃあいいんだ。だから魯大尽は、娘を捜してるってわけさ。娘はおいらの手の中。どうでえ、うめえ話だろう」
「なるほど。それならいい値で買ってくださるでしょう。分かりました。金利なしで宜しいでしょう。で、いかばかりなのですか」
李吉は無精髭の伸びた顔に下卑た笑みを浮かべた。金を返す気などさらさらなさそうだった。
「六貫※、や八貫あれば十分だ」※一貫　銅銭千枚。実際はもっと少ない
借りた金の倍を言った。
「いいでしょう。それでその曹瑛という娘はどこに」
「まあ、ただで金を貸してもらうんだ。教えてやるよ。西の瓦子の真ん中にある勾欄※の裏に縛っておいたぜ。裏には滅多に人が出入りしねえ。見つかることはまずねえさ」　※勾欄　芝居小屋
「そんなところに目をつけるとはさすがですな」
「そうだろう。おいらにも運が向いて来たってことさ」
「それでは、この銀をお使いください」
蔣唐は数個の小粒銀を取り出した。
「ありがてえ、恩にきるぜ」
蔣唐に近づいて来た李吉の足が停まった。
「てめえ……」
李吉の口から噴水のように血が溢れ出した。何か言おうとして口を

動かしはするが、それは声にならず、ただ血と泡だけが間欠的に噴き出すだけだった。李吉の左首に、血に染まった銀の簪が澄んだ音をたてていた。少しの間李吉は立っていたが、目が裏返ると棒のように倒れ込んだ。

「私の娘を……おまえ達なんかに渡さん……」

蒋唐はうわ言のように繰り返していた。

疲れ果てて館の正門をくぐると、一頭の駿馬が見えた。蹄のすぐ上だけが白い、大きな馬だ。

「朧月、おまえがいるってことは、聞起が来てるな」

無用は、久しぶりに聞起に会えると思い、急いで前庁に向かった。

聞起は、出された茶を飲みながら伍小母さんと話をしていた。精悍な顔つきになっている。身体は大きくないが、その目に逞しい輝きを宿している。一見痩せて見えるが、鋼のような筋肉を身にまとっていることはすぐに分かった。黄玉に似てきたな。無用は心の中で微笑んだ。

「おお聞起、暫くぶりだな」

「ああ、無用の小父さん」

振り返りながら聞起が応えた。

無用はそこに、あるべき姿が見えないことに嫌な予感がした。

「伍氏、嬢さんは」

「お嬢様は太原府に向かわれました」

「太原府に。何のために」

伍小母さんは知府からの遣いがあったことを、一抹の不安とともに無用に話した。

無用の脳裏に、森に火を点けて逃げ去った男が浮かんだ。あの時気にかかっていたことが、今明確な形をとって甦った。あれは魯櫂についていた家宰だ。確か丁洪といった。あの男が付け火したとすると、これは明らかに罠だ。魯櫂なら、知府を動かすなぞ造作もない。そして付け火は、自分と雪華を切り離すための策略だ。無用は悔やんだが、

既に後の祭りだった。雪華に報復があるかもしれないことは考えていたはずだ。だが、四六時中ついていられるわけではない。まして、雪華は子供ではない。魯櫂は何かをでっち上げて、知府に吹き込んだに違いない。もっと自分が気をつけるべきだった。無用は痛切にそう思った。

「聞起、直ちに発て。これは罠だ。嬢さんは捕らわれておるだろう。おそらく、宮城の地下にある牢営だ。公に出せない者を監禁する地下牢があると聞いておる」

聞起が無用を見た。目に怯(おび)えの色はない。

「知府の遣いが来るなんて、どう考えたって不自然だ。小父さん、俺もこれは罠だと思う。

まさか、もう殺されてるなんてことは……。とにかく、すぐに黄玉にも報せなきゃ」

「大丈夫だ。魯櫂が欲しいのは嬢さんの命じゃない。遼との交易を握るまでは殺したりせん。だが、それまでに酷(ひど)い目には遭わせられるだろう。その途中で命を落とすこともありえる。急がねばならん」

「知府が相手となると、俺達だけで大丈夫だろうか」

「やってみなくては分からん。儂の手抜かりだ。儂一人でも嬢さんを助け出す」

「敵わなくたって俺はやる。黄玉だって同じさ」

「頼む。おまえの速さと黄玉の武は絶対に必要だ。すぐに朔州(さくしゅう)に駆けて、黄玉を呼ぶんだ。時が惜しい。直接太原府に向かうように言ってくれ。儂は石勇を連れてすぐに太原府に向かう。一刻でも遅れれば、それだけ嬢さんの危険が増す。聞起、おそらくもう、話し合って段取りをつけるなどということは出来んだろう。おまえに任す。一番いいと思う手立てを迅速にやるのだ。儂はおまえを信じておるぞ」

無用の顔は、これまで見たことのない真剣なものだった。聞起は怒りで身体が震えそうになった。三年前の、両親が賊に殺された時以上の怒りだった。雪華姉ちゃんに何かあってみろよ。おまえ達を皆殺し

にしてやる。俺の命なんてどうだっていい、首だけになってもおまえ達を噛み殺してやる。

「曹瑛も危ない。儂を引き付けるために、森に火まで点けた奴らだ。とっくに手を回しておるだろう」

「分かった、小父さん。俺はもう行くよ。全速力で朔州に向かう。黄玉を太原府に向かわせる。その後のことは、俺に任せて」

「頼んだぞ、聞起。陳統には村の者を遣いにやる。おまえのやるべきことは、分かるな」

「小父さんも俺と同じ考えだね。分かってる。黄玉に報せたらすぐ、阿骨打将軍のところに向かうよ。雪華姉ちゃんのためだ、朧月にも無理をしてもらう」

「さすが聞起だ。儂も命をかける。何としても嬢さんを助け出すぞ」

伍小母さんが耐えかねたように泣き崩れた。

「私があの時、もっと強くお止めしていれば・・・」

「伍氏のせいではない。これも一つの運命(さだめ)だ。切り開くのは儂達、そして嬢さんだ」

無用は、そう自分にも言い聞かせた。